

令和4年度

関市総合教育会議

会議録

(令和5年1月26日)

関市

令和4年度関市総合教育会議

1 日 時

開会 令和5年1月26日（木）午後4時00分

閉会 令和5年1月26日（木）午後5時05分

2 場 所

関市役所 3階 庁議室

3 構成員で出席した者

| | |
|----------|---------|
| 市長 | 尾 関 健 治 |
| 教育長 | 森 正 昭 |
| 教育長職務代理者 | 清 水 徹 |
| 教育委員 | 西 部 美 晴 |
| 教育委員 | 末 松 桂 子 |
| 教育委員 | 米 山 英津子 |

4 説明のために出席した者

| | |
|---------------|---------|
| 教育委員会事務局長 | 三 輪 之 |
| 教育総務課長（会議録書記） | 遠 藤 英 治 |
| 学校教育課長 | 山 田 茂 樹 |
| 学校教育課主幹 | 西 川 正 人 |
| まなびセンター副所長 | 寺 澤 徹 夫 |

5 出席した事務局職員

| | |
|-----------|---------|
| 教育総務課課長補佐 | 廣 瀬 正 則 |
|-----------|---------|

6 傍聴者

2名

7 協議事項

- (1) 関市フリー教室事業（L教室）について
- (2) その他

議事内容（概要）

○三輪教育委員会事務局長

定刻となりましたので、ただいまから令和4年度関市総合教育会議を開催いたします。はじめに、尾関市長からごあいさつをいただきます。

○尾関市長

皆さま、改めましてこんにちは。

今日は、総合教育会議ということでお忙しい中、お集まりいただきありがとうございます。

新型コロナウイルスの感染状況でありますけれども、新聞やテレビの報道でご存じのとおり、市内の感染も一時の勢いと比べれば、減りつつあると思っています。新聞などで感染数順に掲載されますと、関市が3番目、2番目ぐらいになる時もあります。関市はどれだけ感染しているのだろうと街中で言われることがあります。前回の県の会議で発表された順位は、10万人当たりで42市町村のうち14位でした。これは、かなり感染した時の状況でしたので、今は比較的順番が落ちつつあり20数番にはなっているのではないかと思います。

とはいえ、学校現場では、ピンと張りつめた状況が続いているのではないかと思います。その意味では、現場の先生方には、大変なご努力をいただいていると改めて感謝を申し上げたいと思いますし、そこで学んでいる子どもたちも保育園幼稚園を含めてですが、マスクの着用などコロナ禍の前と比べると想定できないような信じられないような状況が、3年間続いているので、子どもたちへの影響を懸念しているところです。国では、2類、5類という話が総理の方から出ていますし、マスクについても3月に方針案が変更するという話も下っていますので、国の動きに注視しながら、市教育委員会として判断していくことになろうかと思います。

私も皆さんと同様、中学と高校で日本史、世界史を一通り学んできたわけですが、生きてきて世界的に何かこれは歴史に残るなあという出来事はあったでしょうけれども、今まであまり実感することが少なかったですが、このコロナの世界的なパンデミックの3年間は、50年後100年後の世界史の教科書に載るような歴史の中に、私も皆さんも子どもたちも今いるんだと、それぐらい大きな状況だと思います。

コロナの影響といってもいいと思いますけれども、もともと不登校の問題は、関市も抱えていました。コロナの休校などもございまして、後ほど説明がございしますが、不登校児童生徒は、小中共に増えているという状況にあります。おそらくコロナが少し後押ししたような面もあるのかなと思っています。現場の先生方が、対応していただいておりますが、来年度から後ほど報告があるとおおり、新しい取組を関市として進めながら、少しでも、悩みや不安に寄り添える、子どもたちご家族を含めて、一歩こちらから近づけるような取組をしていきたいと思っていますので、また皆様から率直なご意見をいただければと思っています。

あいさつが長くなって申し訳ございません。限られた時間ではございますが、どうぞよろしく願いいたします。

○三輪教育委員会事務局長

ありがとうございました。この会議の進行でございますが、この会議は市長が主宰し行うこととなっておりますので、以降の進行は尾関市長にお願いしたいと思います。よろしく願いいたします。

○尾関市長

それでは、次第に従いまして、協議事項に移ります。

最初に（１）「関市フリー教室事業（L教室）について」を議題といたします。それでは、事務局から説明をお願いいたします。

○寺澤まなびセンター副所長

（モニターテレビにプレゼンテーション資料を写して説明）

まなびセンターの主要事業は、3つございまして、職員研修事業、子どもたち先生方が使っているタブレットICT、そして不登校対策です。

まなびセンターの隣にふれあい教室（児童適応教室）がございしますが、今日も午前中子どもと保護者が懇談にみえてました。そういった中で、不登校対策として、関市フリー教室事業を来年度考えていますので、お手元の資料と画面をご覧くださいながら、忌憚のないご意見等をいただけたらと思います。では、よろしく願いいたします。

はじめに、現在の関市の不登校の状況をご説明いたします。

不登校というのは、年間30日以上欠席がある児童生徒のことです。授業日数は、年間でおおよそ200日ございまして、そのうち30日以上欠席をした状況を示しています。平成29年度から5年間の不登校児童生徒数の推移です。小学校は、29年度から年々増加し、昨年度は80名を超えました。中学校は、29年度に一度100名を超えましたが、令和に入ってからが増え方が大きくなっています。昨年度は126名で過去最高でした。

毎月学校から、不登校の報告が上がってきますので、月ごとに不登校の児童生徒がどのように推移しているかということ令和2年度からグラフにしてみました。令和2年度は、コロナの影響で4、5月は休校でしたので、6、7月に30日以上欠席した児童が出てきたということです。昨年度は85名でしたが、国の調査では、1,000人当たりの不登校児童数で比較しますと、3年度調査では、岐阜県は15.2人で全国ワースト7位でした。関市は、18.5人とそれを上回っています。今年度は、87名ということですので昨年度を超えております。小学校の傾向としては、5月6月7月で30日を超えてしまっている児童が、過去と比べて増えていると言えます。中学校のグラフでは、昨年度126名、1,000人当たりの不登校生徒数は、52.7人という計算になります。今年度は、133人と中学校も昨年以上に増えております。1学期から欠席数がかさむ生徒が、非常に多いという特徴がありました。

5月6月の初期対応が重要だと考えて、早期の対応は、今までも学校で行ってまいりました。例えば、児童生徒の心の状態を把握するためのアンケートを全ての学校で定期的に行っています。これは旭ヶ丘小学校の高学年用のアンケート用紙です。こちらは武芸川中学校のアンケート用紙です。これらの調査結果をもとに、気になる児童生徒には個別に相談を行うことにしています。

また、教室にどうしても足が向かない児童生徒につきましては、学校に別室を作りまして、市の会計年度任用職員である心の相談員を各校1名配

置して1日5時間勤務していただいて、子どもが来た時に対応しています。学校にもなかなか足が向かない場合は、関市ふれあい教室がわかぐさ・プラザ3階にごさいますので、室長1名、相談員1名置いて対応しています。廊下には、卓球台も用意して活動できるようにしていますし、総合体育館も時々利用することがあります。12月末現在の数字ですが、登録児童18名、登録生徒21名、先週中学生2名の新規登録がありましたので、現在は41名で過去最高の人数です。

校内の別室ですが、心を落ち着かせる一時的な部屋として使ってきましたが、学習にも取り組めるような環境を整えるなど各学校の担当の先生や相談員が工夫して支援しています。

次に、校内の別室の数ですが、2部屋以上ある小学校は12校、中学校は6校あります。年々別室を利用する児童生徒数が増えています。昨年度では、不登校・不登校になる心配がある小学生42名が利用しましたが、そのうち18名は、別室を利用することが何らかのプラスに働き、年間30日以上欠席せず、結果的に不登校には至らなかったことを表しています。

次に、中学校のグラフです。昨年度の別室利用者は80名で、非常に多かったです。この理由のひとつとして、心を落ち着かせる部屋、学習する部屋とはっきりさせることによって、増えてきたということが言えると思います。昨年度の不登校生徒は126名でしたので、そのうちの62名が別室を利用しています。半数が別室を利用しています。従って、より生徒の実態に合った別室の運営を行えば、登校できる日が増え不登校の解消につながると思います。

そこで、新たな試みをスタートするフリー教室事業ですが、心を落ち着かせる部屋、学習に取り組む部屋の両方を併用して生活できるようにすることを想定しました。この環境を整えるには、人的な配置が必要です。心の相談員は、1日5時間待機しますが、教員は空き時間を続けて確保することができませんし、この部屋専用の配置ではありませんので、空き時間に対応することしかできません。

フリー教室では、心の状況に合わせて、心を落ち着かせる時間と学習に取り組む時間を生徒が自分で自由に選択して生活できる場を提供しようと考えました。そのためには、生徒を導いてあげることができる学級担任のような専任の教師がどうしても必要だろうと思います。専任教師を常駐させることで、子どもが自分で自由に選択して学校で生活できるという環境が整います。関市の不登校の現状を考慮し、まずは不登校生徒が多い中学校にフリー教室を設置することが効果的であると考えます。

名前をL教室と名付けようと思います。Learnの頭文字をとって、学ぶ勉強するという意味だけではなく、いろいろなことを知る、分かる、確かめるといった意味があります。L教室で過ごすことで、教室へは行かないけれども、学校生活で身に着けるべきことを少しでも学ぶ、そういう部屋にしたいと思います。

設置の目的は、生徒が自己選択して学習・生活できるようにし、社会的自立を促す。結果的に不登校対策を充実させる。不登校を減らす取組の核にすることです。学習・生活両面の支援ができる経験豊富な教師を室長

に置き、退職校長を会計年度任用職員として、1日7時間常駐できるように考えました。

従来の別室との違いを整理しますと、室長を一人配置することで学級担任のようにその子について学習・生活の支援ができる。一人ひとりの生徒の状況が違いますので、個別に1日の計画を立てる。教科担任は、L教室で学習支援ができる体制を整える。通知表についても学習記録を必要に応じて作成するなど、生徒が安心して過ごせる場所にしていきたいと思います。

どの中学校に設置するかということですが、12月末現在の1、2年生の不登校・不登校ぎみの生徒数は、ご覧のように3つの学校が多いです。緑ヶ丘中学校と旭ヶ丘中学校と桜ヶ丘中学校に配置したいと思います。

各校の不登校傾向についてですが、緑ヶ丘中には27名います。一人ひとり状況は様々で別室を利用した生徒は、比較的少ないです。長期欠席の生徒と欠席日数がまだそれほど多くない生徒の割合が高いです。旭ヶ丘中の特徴は、別室を利用している生徒が多く長期欠席者が緑中より少ないことです。桜ヶ丘中も100日以上長期欠席者は少ない状況です。

3校のグラフを比べると、緑中と桜中には、現在の別室の運営をさらに充実させ立て直しを図るために退職校長を室長に充てるのが良いのではないかと判断しました。旭中には、小中連携を図っている主幹教諭を室長に充て支援することを考えています。

次に、L教室で学ばせたい対象生徒についてですが、怠ける子や問題行動が心配される子、福祉部局と連携しないといけない子などは、L教室の効果が表れにくい場合がありますので、現在、別室を利用している生徒、放課後にのみ登校している生徒、ふれあい教室に申請している生徒などを想定しています。

次に、時間割の例ですが、例えば社会の授業に興味があって学びたいが、教室には行けない場合は、オンライン授業を設定します。英語の先生がL教室にやってくる時間を年間通してスケジュールを組み、英語の先生に質問できるようにします。当面は、2時間勉強を頑張ろうと目標を立てた場合には、あとは好きなことをして、給食を食べて下校することにします。ただ最初からどの子も計画どおり順調にはいきませんので、室長が様子を見ながら徐々に一日のリズムを作るように支援していくことが求められます。

次に、L教室を機能させ効果が得られそうなこと、これまでとの違いを申し上げます。

相談室と学習する部屋のある学校を例にしますと今までは心の相談員がいますので、生徒と一番つながるのは、心の相談員です。心の相談員を通して生徒の状況が学校職員に伝わります。教育相談コーディネーターに情報が入ります。学級担任も授業のない空き時間には来ることができますが、入れ替わり立ち代わりの対応で断片的な情報になってしまいます。不登校対策委員会を開いて対策を練りますが、リアルタイムの情報が入るとは限りません。この生徒を今後どのように対応したらよいか十分に検討できない場合があります。本来は学級担任もこの生徒とつながってほしいのです

が、ほんの少ししか触れ合うことができないですし、全然状況がわからないこともあるので、L教室を設置することにより室長が一番生徒とつながります。生徒の心を落ち着かせたい時には、相談員が対応します。室長と相談員は情報共有が確実にでき、室長を通して学級担任や教育相談コーディネーターにリアルタイムな情報が伝えられますので、不登校対策委員会においても今までより充実できます。学級担任もタイムリーな声かけができると思います。

L教室の時間割は、年度初めに決めておきます。この例では、5教科をあてはめましたが、学校の状況によっては、もっと時間数を増やしたり音楽の時間なども追加できるかもしれません。月曜日には国語の先生が来るとわかっているので、本来学年によって教科担任は異なりますが、国語に関する勉強はできます。このようにして生徒の学習を保障します。

最後に、成果と課題の検証については、各学校で目標値を設定し、年度途中においてもより良い方法で取り組むことが必要かと思えます。また、3校の室長と学校教育課とまなびセンターの職員とが情報を共有して、各学期末及び年度末には、成果と課題について協議する場を設けたいと考えています。

長くなりましたが、以上で説明を終わらせていただきます。

○尾関市長

ありがとうございます。それでは、ただいまご説明をいただきましたので、質疑やご意見等をいただきたいと思います。

○末松教育委員

ご説明ありがとうございます。

子どもたちにとっては、自立できること、社会で働いていけることがすごく大事だと思います。学校へ行きたくてもなかなかいけない子ですとかその子を抱えて将来に不安をもってみえる保護者にとって、このように具体的な方法が示され、大きな支えになるのではないかと思います。

不登校の課題は、私が現場にいる時から気になっていましたが、なかなか対応が難しくて対処的なことが多かったのですが、仕組みをつくるということがよくわかりました。これまでは、相談室での対応することが多かったと思いますが、相談員は5時間しか対応できないという縛りがあり、空いている先生が入れ替わり立ち代わりで関わっていくことは、子どもとの関係において難しい部分がありました。これからは、専門で関わってくださる室長さんがいらっしゃることは、とても大きいと感じました。また、早期の対応が大事ですし、一人ひとりへの対応がとても大事であることがよくわかりました。

不登校になる理由は、10人いれば10通りあって、私の経験としては、福祉部局の力を借りないとお母さんが朝起きれないとか心のケアが必要な子ですとか様々な家庭の事情があるので、他の部局との連携を引き続き図っていただけるとありがたいです。

○寺澤まなびセンター副所長

おっしゃる通り、福祉部局との連携は欠かせないと思います。

昨年度から学校の対応だけでは難しい子については、情報シートをいただいて精査をして子ども家庭課につなげるという取組をしています。

○米山教育委員

今お話をうかがって、不登校は、一昨年よりも昨年、昨年よりも今年度という具合に伸びているという現状とまなびセンターでの取組が実際に効果が出ているというお話から、来年度は、フリー教室設置の実現に向けて、関市は先進的な取組を始めるんだなと改めて思いました。

高校の現場では、不登校の生徒に寄り添うことが私の取組の一つでした。校内では、保健の先生や教科の先生に声かけをお願いしました。家にも何度か訪問しながらなんとか対応したんですが、末松先生がおっしゃられたとおり対処療法でしかありませんでした。

このように仕組みを整えた形でうまく運営できれば、本当に救えるのではないかと感じて、ぜひこれからもお願いしたいと思います。できるだけ私たちも支援したいと思いました。ありがとうございました。

○西部教育委員

私の周りには、不登校の子がいなくてよくわからないんですが、息子が月に1回くらい月曜日の朝にお腹が痛くなるんです。本当に痛いのかかわらなくて、痛いというので熱を測って、痛いというのでお休みして病院へ行くというのを1年間ぐらい繰り返しました。不登校児童になるのかならないのか、その間で毎日過ごしていた時期があったんですけども、今は楽しく通ってくれているので、一時的なものだったのかなと思います。この状態が毎日となると保護者の方もお子さんをどう支援したらいいのか、無理やり行かせるのは、時代的にも違うと思うんですけど、家で見た方がいいのかと迷うと思います。そんな時に学校、ふれあい教室、フリー教室という選択肢が広がるのが、非常にありがたいことだと思いました。また、子どもがどうしようかなと困った時に「じゃあ、フリー教室に顔を出してみたら」と新たに言える場所が増えることは、保護者にとってはありがたいです。

以前、同じような取組をしている岡崎市の様子をテレビで見たことがあります。画期的な事業だと思いましたが、それが来年度から関市でも始まるということだととても期待しています。ありがとうございました。

○清水教育委員

私が学生の頃は、不登校はなかったと思いますが、この人数を見るとびっくりします。おそらく小学校で不登校になると中学校へ行っても不登校であろうと思います。

学校は、卒業すればいいですが、親としては、親が元気なうちはいいですが、社会に出た時に生活ができなくなることが不安で、切実な問題になっていきますので、まず規則正しい生活をするのが第一だと思います。

学校が楽しいなという仕組みを何か取りいれて、家より楽しい学校へ行き、給食を食べて体育をしてということだけでもいいですから、毎日楽しいなということがあれば良いのかなと思います。

人生は、学校を卒業した後の方が長いですから、何とか少しでも学校へ行けるようにL教室へ通える仕組みを作られるわけですから、ぜひ実現していただきたいと思います。

○森教育長

室長になる方は、大変になるだろうと思います。

3、4年前から子ども家庭課が、引きこもりの中学3年生の追跡調査をはじめ、福祉部局と学校教育とが少しずつ連携を進めています。

今年の3月には、まなびセンターのふれあい教室に教員ではなく一般の人で支援していただける方、例えば料理が得意な方、絵が得意な方などを公募してご協力いただきながら支援の輪を広げていきたいと考えています。最終的には、自然の家を利用したり各地域のふれあいセンターを利用して地域ぐるみで何か支援できないかと考えています。

フリー教室を足場にしながら、不登校児童生徒を支えられるような施策を展開していきたいと思います。

○寺澤まなびセンター副所長

ふれあいチャレンジ教室の第1弾として、一般の方が講師となるクッキーづくり。5月と8月には、木彫関係の教室を開催する予定です。3月号の市広報で募集案内をします。

先ほど、清水委員さんからご意見いただきました子どもたちが学校を楽しみたいと思えるような教室づくりを大事にしたいと思います。

西部委員さんからお話しいただきました岡崎市の例ですが、私実際に見てきました。関市のL教室は、岡崎市の良い所を参考にしてこの枠組みを作りました。

○尾関市長

新しく始めるフリー教室、L教室ということで、先ほどもお話ありましたけれども岡崎市のF教室など不登校というのは、全国でもどの自治体もどの教育委員会でも抱えている課題だと思います。いろいろな取組が各地でなされていると思いますので、先進的なところを関市として学ばせていただく、それをうまく改善していいところ取りをして新たにチャレンジしていくことが大事だと思います。

今の時代は、私たちの小さかった頃より速く変化する時代で、いろいろな技術の進歩によりこの先も変わっていく時代だと思います。行政課題も同じだと思いますけれども、この対策を打てば、不登校問題が全てバラ色のように解決するということはありません。

今回、新たにチャレンジするわけですが、来年度の途中であっても改善していく点があれば変えてもらいたい。補足したいことや新たに始めたいことを少しでもお子さんや保護者のためになるように回りながら走りな

がら変えていきながら、改善をし続けることをやらなければならないと思います。大変楽しみにしています。

答えがあるわけではないですが、基本は当然、不登校であれば学校に少しでも来てほしいという考えがありますが、もう一方でそもそも様々な事情で学校へ来れない、集団生活に合わない、そういう子に対して十人十色いろんな考え方があり手が届かないところもあるので、根本は学校であることに私も賛成ですが、それ以外の場合を個人や家族が選択した時にある程度は認めていくという道があるということも必要なのかなと思います。

国の制度では、授業日数にオンライン授業はカウントされないので、難しい面もあると思いつつ、学校に来てもらえるような選択肢を増やすこと。そもそも来れない人のための選択肢を認めること。この二点を考えていただけるといいなあと思いつつ、話を伺っていました。

○西部教育委員

教育長さんの話で、一般の方が講師となることはすごくいいなあと思いました。一般の人からすると新しい事業はなかなかわかりづらいので、一般の方が事業を知ることは、もし不登校になっても大丈夫との認知が広がるので良いと思いました。

○尾関市長

ほかに、ご意見等はございませんか。

なければ、「関市フリー教室事業（L教室）について」は終了します。

次に（２）「その他」でございますが、折角の機会ですので、教育委員の皆さんからご意見ご質問等がございましたらいただきたいと思っております。

○清水教育委員

不登校に関連して貧困問題についてですが、先日、新聞で市内の子ども食堂に関する記事を拝見しました。最近では、セーフティネットが充実しており生活保護や対象者には学校給食費も補助があると聞いています。

親のネグレクトなどの影響があるかもしれませんが、そのあたりの手立ては可能だと思いますが、いかがでしょうか。

○山田学校教育課長

関市では、就学援助制度が整っており、のべ800人程の児童生徒に対して補助しています。給食費もそのうちの一つです。今は、入学準備金の交付時期で、今年度から2月に6万円をお渡しする予定です。

○尾関市長

生活保護、要保護準要保護世帯は、関市では、10%強で推移しています。県内21市では、基準が自治体によって差がありますので、5%未満から12、13%の市もあったかと思っております。関市の基準は、比較的支援できるように支えることができるように範囲を広げていると思っております。メニューもそれぞれの自治体によって差がありますが、関市は、できる限り

子どもたちが学校生活に困らないようにメニューとしても金額としても県内では多く出している方です。

○森教育長

貧困をはじめ、家庭が複雑であったりご夫婦の関係であったり病気など、福祉部局の方が個別にかかわって支えていただいています。ここ数年、この傾向が強くなってきていますので、大変ありがたいことです。

○末松教育委員

家庭の不和もそうですが、子どもの責任ではなく問題を抱える子がかかりいて、自分たちが育ってきた頃とは状況が変わってきています。

周りの大人が子どもたちに「あなたのことを見てるよ」「大事に思っている人がほかにもいるよ」ということを伝えることが大事だと思います。

それぞれの家庭で背負っていることもあると思いますが、学校では子どもたちが笑顔で過ごして帰っていけるようにしていただきたいです。

○米山教育委員

子どもは、慣れないことをする時には苦痛が伴うものですから、家族の協力が必要だろうと思います。家庭が複雑になってきていて生活することさえもできない家庭があることを私が女性相談員を務めていた時に見てきました。この支援策として、お母さん同士のかかわりの中で、お母さんたちに「子どもにはこういう関わりが必要だよ」「子どもってこう変わっていくよね」ということを何らかの形で伝えられる場があると良いと思います。そして、お母さんたちの心が楽になったり、よし何かやってみようかなという気持ちになったりという可能性があるのです。今の時代どこの家庭も複雑ととらえれば、ぜひそういう場面づくりをしていただけるとありがたいと思っています。

○森教育長

いろいろなご意見ありがとうございました。

認めていただいたことを来年度に向けてまなびセンターが中心となって、チャレンジしながら改善しながら、少しでも子どもたちのためにより良い事業となるように取り組んでいきたいと思っています。

○尾関市長

本日の協議事項は全て終了しました。ありがとうございました。

○三輪教育委員会事務局長

それでは、これもちまして、令和4年度総合教育会議を閉会といたします。皆さまにはご協議をいただき、誠にありがとうございました。